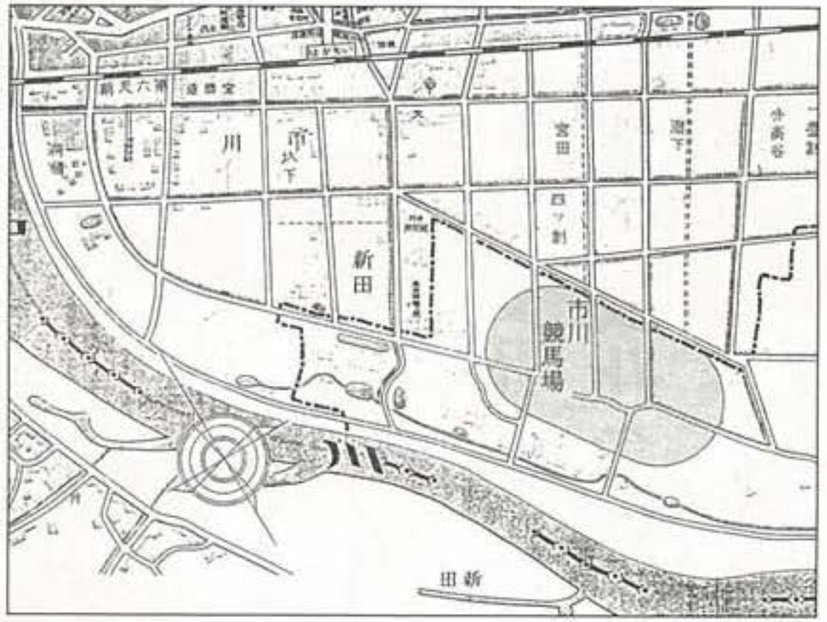
市川のまち 地名の由来

No.18



市川競馬場があったころの市内図

デルタがつくった大きな洲

大洲

今から五千年ほど前の関東地方は、海が台地の裾まで深く入り込み、関東平野の最も低い部分は、「奥東京湾」と呼ばれる海になっていました。やがて、その海が徐々に後退すると同時に、山地から大小の河川が大量の土砂を運んで、河口へ河口へとデルタ(三角洲)を広げていくことになりますが、東京湾に面した下総台地の前面でも、砂州が形成され、台地との中間に湿地帯をつくっていきました。これが本市市域では、以前に掲載した菅野・東菅野の地にあたります。その後、江戸川によって運ばれた土砂が砂州の前に広がり、行徳・浦安地域がつくられていきます。

このデルタの形成途上で、砂州の南側に大きく半月状の地域がつくられました。これが、今日の大洲の地域です。即ち、大洲とは、デルタが形成した大きな洲を指したものなのです。

現在は暗きょになってしまいましたが、かつて北越製紙から明治乳業の前の通りには、堀割りが通っていました。その堀割りの西(江戸川沿い)を「外大洲」、東を「内大洲」と呼びました。当時、この地域は行徳町に属し、全体がアシ・カヤなどの密生する湿地帯のままで近代まで続きました。それが、大正期における耕地整理で、一部耕地として利用されるとともに、工場用地として開発されるようになりました。大正九年四月、新潟県長岡に本社をもつ北越製紙が、市川工場の操業を始め、昭和三十年には、この地域も市川市に合併し、同三十六年七月には、明治乳業市川工場が設立されています。

昭和六年、この大洲に、市川競馬場が開設されました。これは、現在の明治乳業を中心に西は大洲中学校、東は第八中学校に及ぶ範囲で、馬場は一周千六百㍍。第一回の開催は同年十二月十八日から三日間で、当時の記録によると、入場者が六万八千三百二十七人、馬券売上額は十八万五千三百七十三円を数えたといいます。市川競馬場は、十三年に廃止になりますが、その間、年とともに順調な成績をあげ、十三年には春秋八日間で入場者三十八万四千七百三十六人、馬券売上額百六十一万四千二百七十四円にものぼりました。しかし、この競馬場は、観覧席が建設できず、「野天競馬」の汚名を付けられたまま廃止になりました。当時、大洲中学校から北に向かって国道14号に出る通りを、「競馬通り」と呼んでいたといいます。

次回は「須和田」を予定しています。

(社会教育指導員・綿貫喜郎)